蒼海走破

地雷也

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年が〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の世界でクランを組んで決闘や討伐などのランキングや冒険を楽しんでいく物語。リアルとデンドロ２つの世界を通して少年少女は交流していく。

▼本作品は現在、小説家になろうで連載中である〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉の二次創作です。▼原作改変、捏造設定などがありますので、それらを踏まえた上で読んでいただけると幸いです。

初の小説なのに登場人物たくさん出てくるクランタイプの物語口調などかき分ける自信もなく見苦しいものになるかもしれません。

目次

開始前 ―― 1
キャラメイク ―― 7

開始前

□２０４４年　３月２０日　長谷川　千万

「・・タカ、起き・カズ・・、千万。いい加減に起きなさい千万。」

体を前後に揺さぶられたことで意識がはっきりしてくる。

「船で熟睡できるのはいいことだが、もう港に着いてるぞ。

のんびりしすぎると船員さんに迷惑がかかるから、早く降りる準備をしなさい。」

父さんがそう言って急かしてくる。

「寝る前に、まとめてあるからこのかばんを担ぐだけだよ。」

僕は、まだ半分寝ぼけながら父さんに返答をする。

「そうか、準備がいいな。降り口に行こうか。」

わしゃわしゃと頭を撫でて立ち上がる。

「はーい」

船を降りて港の駐車場へ向かって歩いていると、港の人だろうか、父さんと同年代くらいの男性が話しかけてくる。

「長谷川先生お帰りなさい。」

「ああ、立花さんこんにちは。」
　立花さんは日に焼けて真っ黒なうえ筋肉でシャツがピチピチで少し怖い。
「千万。この人は立花さんこの島の漁港の網元さんだよ。挨拶をしなさい。」
「は、はじめまして、長谷川千万です。引っ越してきましたよろしくお願いします。」
　僕の声は少し震えてしまった。
「お、エライのう、わしは立花つよし。網元という漁師のリーダーをしとるよろしく。」
「息子も島で生活することになりましたので、これからよろしくお願いします。」
　そういって車へ向かって歩き出した父さんと立花さんは歩きながら会話している。
　1週間ほど父さんは職場である島を離れていたので、その間に起きたことなど話しているようだ。
「千万くんは、今年から4年生やろ、娘の灯が同い年やから学校行ったら仲良くしてくれ。」
　と言って立花さんから唐突に僕へ話がとんできた。
　まわりをきょろきょろ見ていてほとんど聞いていなかったが、
「はい」と元気よく答えておいた。
「引っ越し祝いに魚捌いても持っていきますから。」
　車に到着すると立花さんは離れていった。

車で走っていると父さんから
「千万には迷惑をかけてすまないな」
「別に気にしてないよ。ネット繋がってれば生活に困らないと思うし」
僕は携帯をいじりながら答える。
僕こと長谷川千万（ハセガワカズタカ）は、両親が離婚したため父親の勤務先であるこの島へ引っ越してきた。
父はこの島で医者として働いている。常在の医者は父さんだけと聞いており、かなり大変そうだ。
親権に関してはかなり揉めたそうだが、母さんが専業主婦だったので親権は父さんに渡った。
引っ越しに関してはネットがつながれば本当に気にしていない。
転校に関しては、再会を約束したり、最後に泣いてくれる人も特におらず、少し寂しかったのは内緒だ。もっとアニメ的に幼馴染とかがいてくれたらちがったのだろうか。
「・・そうか。」
父さんは少し暗そうに返事してくるので、少し心配だ。
父さんは責任感の強い人なので親の都合を押し付けることが嫌なのだろう。
「自然も多い良いところだと思うよ。ごはんも美味しそうだし。」

僕は当たり障りのないことを言って話を終わらせる。
「千万着いたぞ。今日からここに住むんだ。２階はどの部屋も使ってないから好きな部屋を選んでいいぞ。」
４年前に勤務になったときにリフォームした２階建ての家で２階には３部屋あるようだ。荷物は明日届く予定なのでそれまでに部屋を決めろとのことだ。
「部屋を決めて荷物置いたらリビングに来てくれ。プレゼントがあるからな。」
「はーい」
僕は父さんのプレゼントにあまり期待せず階段を上がっていく。
海が見える部屋で荷物を下ろすとぼやいてしまう。
「確か前に父さんからもらったプレゼントってこの島の工芸品だったよな。」
なにかゲームソフトだと嬉しいんだけどな。下火だけど最近出た『炎の息Ⅻ』とか欲しい。
「父さん海が見える手前の部屋使うよ。」
「わかった。すまないが、診療所を開けないといけないから、業者が到着したら立ち会いをしてあげてくれ。家具の組み立ても依頼してあるから心配ないぞ。」
「わかった。それで父さんプレゼントってなに？」
「ちょっと待ってろ」父さんは台所に取りに行ったようだ。持っている包装された箱は、

顔ぐらいのサイズだ。こんな大きいゲームソフトはないだろうし、内心がっかりしていた。

「ほらほら、開けてみろ。」父さんがニヤニヤしながら催促してくる。このプレゼントにそんなに自信があるのだろうか？

僕は、包装紙を乱暴に破いていくと入っていたのは今一番話題で、最も入手が困難な〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉が入っていた。

「おーーーマジで、マジで〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉なの？偽物じゃないの？」

かなり大きな歓声を上げてしまう。

「友達のゲームライターにお願いして準備してもらったんだ。」

「ありがとう。父さん、ものすごくうれしい。人生の中で一番うれしいかもしれない」

「お、大げさだな。」

大げさでもなんでもなくものすごいうれしかった。クラスに一人持っていたやつの自慢を聞くのが、どれだけ苦痛だったかはそれだけで小説１本かけるくらいだ。毎日、掲示板などに入り浸って世界やジョブ、エンブリオの情報を見てどれだけ空想していただろうか。

とにかく早く上に行って始めようと駆けだそうとすると父さんから呼び止められた。

「そのゲームを融通してくれた友達なんだが、明日の１３時にグランバロア初期ログインの中央船の甲板にいるから最初サポートしてあげようかと言ってたな。もしそこにするなら連絡するけど、どうする？」

　グランバロアは空想していた中でも第一候補だった。漫画史における金字塔漫画の影響が大きいよな。海賊系の超級職はもう埋まってると掲示板には書き込みあったのは残念だ。

「わかった。グランバロアにするから。待ち合わせのためにその人のＰＣ名教えてよ。」

「連絡しておくよ。名前は『醤油抗菌』だな」

キャラメイク

□２０４４年３月２０日

部屋に戻って先ほど告げられた醤油抗菌に関して掲示板に挙げられた情報を思い出す。

醤油抗菌というＰＣ名はグランバロア関連の掲示板を覗いたことがあるなら一度は目にする名前だ。討伐と決闘ランキングのランカー。”人間爆弾”という物騒な通り名を持ち、頭が痛くなる逸話をいくつも持っている。

曰く、半径５００メートルの海水を全て爆薬に変え、モンスターの群れを木っ端微塵にした。

曰く、敵対クラン所属の〈マスター〉の体液を爆薬に変え、そのクランのアジトを吹き飛ばした。

「会うのは怖いけど、そんな人にサポートしてもらえるならスタートダッシュになるよな。」

とつぶやきながら考える。

無駄な時間を作らないためにも、キャラメイクとエンブリオの孵化とジョブの取得ま

で進めておこう。
トイレ、食事はＯＫ
ゲーム機のヘルメットをかぶりスイッチを入れる。
光を感じると景色は一変していた。
「はーい、ようこそいらっしゃいましたー」
気がつくと自室ではない空間に僕はいた。
部屋の内装は木造洋館の書斎を思わせる。
そこにいたのはベストを着た猫チェシャだった。
多くのプレイヤーのチュートリアルに登場しているＡＩだと掲示板に上がっていた。
レアなＡＩに当たってみたかったなと考えてしまった。
「一番多いぼくでごめんねー」
思考が読まれているのだろうか、びっくりして変な声をあげてしまう。
「こちらこそ、変なこと考えてごめんなさい。」
「いいよ、いいよ、気にしないで。事前に情報集めてた人には多い反応だから。それにしても僕たちＡＩに謝る人は珍しいかな。」
「本当にデンドロの中なんだ。目を閉じて開けたら切り替わってるなんてすごいです」
「ふふふ、ありがとう。それじゃあ各種設定を始めるよ。まずは、描画だよ。３種類に切

り替わるから選んでね。」
　３Ｄは酔いそうだし、アニメ描写はリアルに戻れなくなりそうだしな。
「そのままでお願いします。
「オッケー。次はプレイやネームだよー。ゲーム中の名前は何にするー？」
「ウィルでお願いします。」
「その名前は使用している人がいるね。そのまま進めることもできるけどどうするー？」
「じゃあ、苗字としてテンミリオンをつけてください」
「オッケー。該当なしだよ」
「次、容姿を設定してねー。」
　のっぺらぼうと膨大なデータが表示される。
　チェシャにお願いして自分のリアルをデフォルトに設定してもらいいじっていく。
　出来たのは身長１２０ｃｍほどの金髪碧眼の少年だった。あんまり原型が残らなかった気がする。
「初期の所持品をプレゼントするね。」
　アイテムボックスと５０００リルと初期装備に選んだ革鎧と長袖シャツにズボン、ブーツと身長よりも大きな槍を受け取る。

自分よりも大きな武器を操る小さい戦士ってかっこいいよね。
「〈エンブリオ〉の移植だけど、〈エンブリオ〉の説明はいるー」
「予習してきたので大丈夫です。」
「オッケーじゃあと言ってるうちに〈エンブリオ〉移植完了です」
すごいいつの間にか移植されていると話題だったからずっと左手を見てたのにまばたきしたら移植されてた。
「じゃあ最後に所属する国を選択してくださいねー」
「グランバロアでお願いします。」
「ちなみに軽いアンケートだけど選んだ理由はー？」
「父の知り合いの方がサポートしてくれるとのことなのと、漫画の影響です」
「うんうん、答えてくれてありがとうー」
「いよいよグランバロアに飛ばすね。大丈夫ー？」
「よろしくお願いします。」
「〈Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｄｅｎｄｒｏｇｒａｍ〉へようこそ。〝僕ら〟は君の来訪を歓迎する」